

氏名	青木 萌			
学位の種類	博士 (文学)			
学位記番号	博甲第 192 号			
学位授与の日付	2015 年 3 月 31 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
学位論文の題目	現代中国語における副詞“在”の意味と論理			
論文審査委員	主査	神奈川大学	教授	松村 文芳
	副査	神奈川大学	教授	彭 国躍
	副査	神奈川大学	准教授	加藤 宏紀
	副査	神奈川大学	准教授	村井 寛志
	副査	神田外語大学	准教授	布川 雅英

## 【論文内容の要旨】

青木萌氏から提出された博士学位請求論文『現代中国語における副詞“在”の意味と論理』について以下、(1)研究の目的、(2)論文の全体の構成、(3)各章の内容の順に述べる。

### (1)研究の目的

青木萌氏は従来から現代中国語における時間体系の研究を進めているが、副詞の中で“在”が「進行をあらわす」と説明されるにもかかわらず、時間副詞の中に含まれず、またその「進行」が具体的にどのような状況を表示するのか、その意味の論理表記がどのように可能であるのかを明らかにしてみたいと思い、このテーマで“在”の意味と論理構造を探求することにした。

### (2)論文の全体の構成

まず第一章「副詞“在”の先行研究」では 19 の先行研究を取り上げ説明した。第二章「副詞“在”と前置詞“在”の統一的解釈」においては進行の意を表す副詞“在”がその後意味上、場所を表す目的語を伴っていることを示すことによって、論理的には前置詞の“在”と同一の役割をしていることを示した。第三章の「副詞“在”の生成過程」では 1)オートマトン、2)状態遷移図、3)論理回路と論理式、4)タイプ理論、5)談話概念を導入した論理式等を用いて“在”の生成過程を述べた。第四章では「[現場進行]における副詞“在”と[非現場進行]における副詞“在”」と題して“在”の表す状況が[現場進行]と[非現場進行]によって大きく異なることを明らかにした。第五章では「副詞“在”が表す[複数のできごと]の存在」をテーマに副詞“在”が同一場面で複数の状況を表すことを 1)複数の時間概念、2)複数の場所概念、3)複数の動作主、4)複数の動作行為の対象、5)他の文脈を基準に証明した。第六章「副詞“在”の文における時制構造」では絶対時間と相対時間を組み合わせて、「過去・現在・未来」と「進行」の意味がどのようにして整合性を得るかを論じた。第七章の「副詞“在”と副詞“正”の意味と論理」では副詞“在”が存在量化の意味を有することを、副詞“正”が普遍量化の意を持つことを提案、説明した。

### (3)各章の内容

第一章の「副詞“在”の先行研究」では先行研究から明らかになったことを次のように述べている。第一に副詞“在”の意味を記述するのに多くの研究者が「動作の進行」と述べていることであ

る。本論文では「命題の進行」という立場を取る。第二に副詞“在”は現在，過去，未来のいずれにおいても生起しうることである。従って本論文では副詞“在”は時態(Aspect)であるとみなす。第三に副詞“在”は“经常”，“总”，“一向”，“一直”，“还”，“又”，“已经”といった成分と共起するということである。第四は副詞“在”と前置詞の“在”はともに状況語となることから両成分の境界線は曖昧になる可能性があることである。

第二章では「副詞“在”と前置詞“在”の統一的解釈」と題して，副詞“在”によって構成された“在+動詞”は実は前置詞“在”に後続する目的語が省略されたものであると主張している。つまり“在”は副詞であるか，前置詞であるかを問わず，ともに「述連構造」の最初の動詞であると考えるのである。従って“在”の後方には必ず意味上，目的語が存在すると見なすのである。そこでその目的語の特徴と有無によって次の三個の構文が考察の対象になると言う。それは 1) 出来事地点が既知の情報と見なされて目的語が省略された“在”構文，2) 出来事地点が特定化できずに目的語が省略された“在”構文，3) 目的語が生起した“在”構文である。さらにこれらの“在”構文について用例をあげた後，それらの意味を論理式を用いて詳細に記述している。

第三章「副詞“在”の生成過程」においては第二章において用いた論理式の意味記述における有用性を別の角度から論じた。それは「3.1 オートマトンによる解析」，「3.2 状態遷移図による解析」，「3.3 論理回路と論理式による解析」，「3.4 タイプ理論による解析」，「3.5 談話概念を導入した論理式の生成過程」等の節において詳細に論じられている。中国語のような自然言語の意味の記述に情報数学のアイデアが導入されることは従来なかったことであり，ここでの議論の正当性は今後の評価に待つが，意味理論の開拓の場を示したことは評価して良い。

第四章「[現場進行]における副詞“在”と[非現場進行]における副詞“在”」では王還主編(1997:1103)の記述をヒントに副詞“在”が用いられる文を[現場進行]と[非現場進行]の二つのタイプに分けている。さらにこの二つのタイプの違いを次の三点において指摘している。第一に「現場進行」の文は出来事が発話時間において存在している「進行」であり，「非現場進行」は発話時間に制限されず出来事が複数存在していることを示す「進行」である。第二に「現場進行」の文の出来事地点は発話者が把握した特定の地点であり，「非現場進行」の文の出来事地点は複数に及び，一つの出来事地点を明示できない。第三に「現場進行」の文は出来事の高発を示す成分が存在しないが，「非現場進行」の文には出来事の高発を示す“最近”，“现在”，“每天”，“一天到晚”，“一直”，“六年”のような成分が存在する。タイプの違いを論じた後，テレビドラマから採集した用例を「現場進行」のタイプを5例，「非現場進行」のタイプを7例あげて，論理式を用いて詳細に意味を記述している。

第五章では「副詞“在”が表す[複数のできごと]の存在」と題して副詞“在”が表す「進行」の概念が表示する[複数のできごと]の存在を次の五つのタイプの文に分けて明らかにしている。分類の基準は次にあげる例によって明らかである。五つのタイプの文は，1) 複数の時間概念から「進行」を明確に判断できる例，2) 複数の場所概念から「進行」を明確に判断できる例，3) 複数の動作主から「進行」を明確に判断できる例，4) 複数の動作行為の対象から「進行」を明確に判断できる例，5) 他の文脈から「進行」を明確に判断できる例である。この章が本論文の「さわり」の部分であるので1)について用例を一つあげて説明しておく。用例“我上学背着,我吃饭也背着,我上体育课也背着,我睡觉也背着,我时时刻刻都在背着它。”(ぼくは登校の時に背負っていて，ご飯の時も背負っていて，体育の授業でも背負っていて，寝るときにも背負っていて，どんな時でもずっと背負っているんだ。)において“在”は“背着它”という出来事が“上学”，“吃饭”，“上体育课”，“睡觉”という出来事と共起していることを同時に表示していると考えるのである。換言すれば大きな一枚の静止画の画面に“上学背着它”，“吃饭背着它”，“上体育课背着它”，“睡觉背着它”という四

枚の子画面が同時に表示されていることを“在”は示しているということである。ただ“在”の役割は四枚の子画面を表示する一枚の親画面を示すことまでであり、用例に見られる出来事の配列は動作主の習慣的行為という言語外知識によって決定されるという。

第六章では「副詞“在”の文における時制構造」と題して副詞の“在”と時制の関係を考察している。すでに“在”が時態を表示することは明らかにされているので、“在”が表示する時態が時制とどのように結びつくかを解明する。ここでは現代中国語の時間体系の記述に用いられる絶対時間と相対時間という概念をからませて副詞“在”の役割を詳述している。ここでの論点は次の三つである。1)絶対時間から考察すると発話時間(speech time)と時態副詞“在”の文における出来事時間(event time)の関係は三つのタイプがある。それは「過去」における進行、「現在」における進行、「未来」における進行である。2)相対時間つまり参照時間(reference time)から考察すると参照時間と時態副詞“在”の文における出来事時間は「簡単」(simple)の関係を構成する。3)集合論から副詞“在”が生起した文の成立の過程を考察すると、時間体系から見た“在”構文の成立は時相表現から時態表現へ、時態表現から時制表現へというプロセスを踏むというのである。この章では実例を六個あげて詳細に発話の状況を記述し、論理式によって意味を表示している。

第七章「副詞“在”と副詞“正”の意味と論理」では従来の研究では十分な意味の究明がなされなかった“在”と“正”について個別に用例を検討することによって“在”が「複数の出来事の存在」を、“正”が「複数の出来事の包括」を表すという考えを提案した。さらに“在”がその論理式を存在量子(existential quantifier)を用いて表示できることを、“正”が全称量子(universal quantifier)によって論理式を表示できると述べている。ここでは“在”について五つの例を挙げ、それぞれの発話の状況に対する詳しい説明を行い、論理式を明示してしている。“正”についても先行研究を調査した後、七個の用例と論理式を詳細に論じている。そして最後に“在”と“正”が共起した用例“我现在正在调查,……”について、この文の生成過程は①“我调查”②“我在调查”③“我正在调查”の順であることを主張している。

## 【論文審査の結果の要旨】

青木萌氏のこの論文に対して行われた博士論文口頭試問委員会における審査委員各位の意見、評価、および当日交わされた議論をふまえて次に論文審査の結果を述べたい。

第一に青木萌氏のこの論文の評価できる第一の点は先行研究の紹介の部分を除き、すべて自分が収集した用例にもとづき論の展開が行われていることである。

第二に用例の収集はテレビドラマの会話文から採取している。このような用例に対しては追跡調査がむずかしいという意見もあったが、現在ではこのような映像言語資料は放送のみならず、DVDやMPEGデータとして提供されているので追跡調査は可能になっている。従って本論文で用いた多様なデータソースはその有用性と独創性を認めることができる。

第三に映像言語資料は用例の存在する場面、つまり文の用いられている状況を明示しており、状況の明示はその文の意味の真偽を決定する根拠となるのであるから、その点からも映像言語資料の利用は評価して良い。

第四に青木萌氏は議論の焦点となっている文について、それが発話される状況を詳細に記述している。この記述を饒舌であるとする意見もあるが、文の意味の決定にはその文字列の表す意味に加えてその文の用いられている状況が重要な役割をすることを考えると、詳細な状況記述はその必要性を認めることができる。

第五に青木氏がこの論文で採用している形式意味論の枠組みは文の意味を真か偽かで決定するが、その決定の根拠はその文の生起する状況（可能世界）によっている。従って映像言語資料は形式意味論の意味の決定に、とりわけ文の外延の決定における第一級の貴重な判定基準を提供するものであると言って良い。とはいえ、このことから小説等の書記言語からの用例の採取が必要でないということは言えないのであって、今後の用例採取の多様化を期待したい。

第六に先行研究の紹介の中で用例を提示していない所があり、用例を補充しておく必要があるという指摘があった。また説明の前後を組み替える方が理解が容易になるという意見もあり、いくつか論理の飛躍が見られるというコメントも提示された。

第七に“在”が副詞と前置詞とを兼ねることについてはすでに朱德熙 1982 等の指摘によって明らかになっており、また多くの先行研究によっても「進行の意味を表す」ことは示されているが、それらの記述する「進行」の具体的意味が詳細に示されることはなかった。この論文がその意味を「複数のできごとの存在」ととらえたことは評価できる。

第八に第五章で“在”が〔複数の出来事の存在〕を表す根拠を「時間概念」、「場所概念」、「動作主」、「動作行為の対象」、「他の文脈」に区分して詳述しているが、このことは従来誰も述べていないことであり、この論文の最も説得力を持つところである。

第九に第四章では「進行」の意味を「現場進行」と「非現場進行」に区分することに成功しているが、この区分に採取した映像言語資料が大きな役割をはたしていることが指摘された。

第十に第六章は時態を表す“在”と時制構造との関連が述べられているが、ここでの記述も従来明示的に行われていなかった説明をはっきりとさせ、中国語の時間体系の錯綜する部分に光を当てたと言える。

第十一に第三章ではオートマトン等を利用した新しい試みも展開している。ここでの意図は論理式の構築がオートマトンや状態遷移図、論理回路等のアイデアによっても保証されうることを確認していることにある。ここでの論述は今後の研究の発展に期待するところが多いが、新しい試みに挑戦している点を評価したい。

第十二に第七章は“在”と“正”についてそれぞれ「複数の出来事の存在」と「複数の出来事の包括」という新しい見解を提起している。ここでの論述に大きな問題点は見いだせないが、その見解の正当性については今後の評価に待ちたい。

以上、青木萌氏の博士学位請求論文を精査し、博士学位論文口頭試問委員会の各審査委員の意見、評価等を尊重し、学位論文公聴会における活発な議論をふまえて、論文の内容を審査した結果、青木萌氏のこの論文が博士（文学）の学位をうけるにふさわしいと判定した。